第183回 長崎大学ＦＤ実施報告書（平成 31年3月 29 日提出）

１．題　目：大学における「学びのユニバーサルデザイン」の実践

２．日　時：　平成 31 年 2 月 1 日（金）　10：30 ～12：00

３．場　所：第５会議室（教育学部２階）

４．主　催：長崎大学 障がい学生支援室

５．対　象：学内教職員

６．長崎大学ＦＤに関する申合せ第２第１項への該当について【複数選択可】
（該当するものに○を記入すること）
［　○　］(1)　教員の教育活動に関するもの
［　　］(2)　カリキュラムの改善に関するもの
［　　］(3)　教育の組織的改善に関するもの
［　　］(4)　入学者選抜方法の改善に関するもの
［　　］(5)　その他教育改善及び入学者選抜方法の改善に関するもの

７．今回のＦＤの趣旨・意義（６．に関連した形で記述すること）

平成 28 年に「障害者差別解消法」が施行され、合理的配慮を受ける学生数が増加する中、本学でも今年度は既に 55 名に達し、今後も増える見込みである。

配慮は原則として個別に調整されるため、長い時間と多くの労力を要することもあり、特に授業担当教員や学務担当者の負担軽減及び対応の合理化と迅速化が急務となっている。また、高い頻度で実施される個別の配慮（例：事前に授業資料を提供することや、情報や指示の提供・提示は口頭のみに行わず、紙やホワイトボード等にも書くことなど）は障害のある学生のみならず、多様化する全ての学生の学習において有用である。

このような対応は、「学びのユニバーサルデザイン（UDL)」の考えに基づくものが多く、UDL を導入することにより現在の個別配慮を「配慮」から「通常の教授法」への改革を促進することができる。そうすることで、個別に調整や配慮を行う必要が減少し、関係教職員への負担軽減に繋がるとともに、全ての学生にとって『より学びやすい』環境の整備に寄与するところに意義がある。

８．プログラム構成［題目・担当講師］（当日使用した資料等を添付すること）

1. 導入　10:30－10:35
ピーター・バーニック（障がい学生支援室 助教）
2. 第１部　10:35－11:00
「ＵＤＬ概念に基づく授業設計及び授業活動」
3. 第２部　11:00－11:30
「実際の授業を見ながらＵＤＬを検討する」
4. 第３部　11:30－11:40
「ＵＤＬを考慮した成績評価について」
5. 質疑応答　11:40－12:00
今回の講師（上記全てにおいて共同）
Norman Jean Stodden（ハワイ大学マノア校 障害学研究センター 准教授）
高橋　桐子（東京大学先端科学技術研究センター 特任准教授）

９．参加者：　14 名（学内教職員 14 名）

（内訳）

所　　属	人　数
多文化社会学部	0
教育学部	3
医学部	1
水産学部	1
医歯薬学総合研究科	1
工学研究科	1
熱帯医学研究所	1
保健・医療推進センター	3
学生支援部	1
障がい学生支援室	2
計	14

※　別紙に参加者名簿を添付してください。

１０．実施したＦＤの成果等

（１） 参加者からの評価（アンケートの集計結果を記述する）

1. 参加者

	長大教職員
参加者数	14
回収数(回収率)	9(64%)
教育職員	10
事務職員	2
技術職員	2

2. 年代

	人数	%
20 歳未満	0	0%
20 代	1	11%
30 代	2	22%
40 代	3	34%
50 代	2	22%
60 代	1	11%
70 代以上	0	0%
計	9	100%

3. 参加動機について(複数回答可)

	人数	%
自分自身や家族のため	5	55%
仕事上必要なので	9	100%
障がい者の支援等に関心があるから	6	66%
社会的関心が高まっているから	1	11%
その他	0	0%
計	21	
実数	9	

4. 講演会をどのようにして知りましたか（複数回答可）

	人数	%
長崎大学ホームページ	3	33%
ポスター・チラシ	2	22%
メール	6	66%
テレビ・新聞等	0	0%
担当者からのすすめ	2	22%
上司からのすすめ	0	0%
友人から誘われて	0	0%
小・中・高校からの通知	0	0%
部局からの通知	1	11%
その他	0	0%
計	14	
実数	9	

5. 講演の内容はあなたの期待に合っていましたか

	人数	%
期待した内容でとても良かった	5	56%
まあまあ良かった	2	22%
期待に沿わなかった	0	0%
その他	2	22%
計	9	100%

〈以下、アンケートの自由記述欄の設問と回答〉　※貴重なご意見等のため、全文記載

●今後、障がい者の理解及び支援等に関する講演でどのような内容を希望しますか

・様々なアプリデバイスなどに関するもの。 ・UDL の理念そのもの。
・具体的な支援の例

●意見・感想

・UDL は多様性を知り、その多様性に応じた方法のレパートリーを知り、学生に選ばせるという教員が大きく変われることが必要な取り組みであることが分かった。「我々が変わる」という認識と大学全体で共有していなければならないと思った。 ・具体的な取り組みについて UDL の観点から考えるワークもよかった。 ・具体的取り組みも勉強になった。

・準備ありがとうございました。とても学びの深まる内容でした。学生の側に立って学生が「学ぶ方法、方略」は一つではないということを、もっと共有していくことが大切だと思いました。講義だけでなく、ゼミナールの内容や方法も考え直す視点となりました。学生との関わりや対話が大切だと思います。
北村先生の授業、学生時代に受けたかった～と心から思いました。 インプット、アウトプット方法を決め付けずチョイスさせることによって、学生も能動的になり、先生も学生の隠れた状況を把握できるようになると感じた。

（２） 総　括（１０（１）を踏まえＦＤ全体の総括を記述する）

FD 参加後のアンケートについて 9 名（全参加者 14 名の 64%）から回答が得られた。回答した方の今回の FD に対する満足度は高かった（「期待した内容でとてもよかった」及び「まあまあよかった」を合わせて全体の 78%に該当）。なお、「期待に沿わなかった」の回答者はいなかった。一方、「その他」と回答した 2 名はいたが、意見・感想部分を見ても、その意図等が明確ではない。

アンケートの自由記述欄では、UDL（学びのユニバーサルデザイン）およびそれに関連する事例や更なる具体的な取り組みへの関心が目立った。障害のある大学生のためだけでなく、全般的に多様化している大学生に教えるといった観点からも、参加者は多様な教育方法の必要性と有効性を感じたようである。限られた資源の中で質の高い教育を維持するためには、UDL の導入は一つの有効な選択肢である、ということをより広く認識してもらうように、今後も大学教育イノベーションセンター等の学内部署・組織と一緒に検討しながら推進していきたいと考える。

１１．実施代表者の連絡先

部　局：障がい学生支援室
職　名：助教　　氏　名：ピーター・バーニック
e-mail：bernick@nagasaki-u.ac.jp　　内　線：２９４８

１２．申請者の連絡先

部　局：
職　名：　　（同上）　　氏　名：
e-mail：　　内　線：